

研究論文

19世紀後半の中国社会とキリスト教教育における英語の位置づけ—「英語論争」の背後にある入華プロテスタント宣教師の英語観—

張 尋

キーワード：プロテスタント宣教師、英語イデオロギー、近代中国、キリスト教宣教と言語、言語教育政策史

要 旨

本稿は19世紀後半の中国における欧米プロテスタント宣教師が持つ英語イデオロギーの解明を目指す。アヘン戦争後、宣教師たちは中国本土に進出し、宣教活動の一環としてキリスト教学校を設置しはじめた。それらの学校への英語の導入をめぐり、19世紀後半には、中国各地でさまざまな教派の宣教師の間で「英語論争」が繰り広げられたが、その根底には中国における英語の位置づけに関する宣教師たちの言語観がある。本稿は、宣教師たちによる論考と、宣教師集会での発言といった文献資料を通じてその英語観の詳細を考察する。

不平等条約の締結を活用して中国に入学し、半植民地状態の中国で教育活動を進めた宣教師たちの言説には、言語帝国主義の特徴が現れながらも、現地語の価値も大いに認めるという言語観が示唆されている。このような宣教師の英語観は、中国におけるプロテスタントの宣教事業とキリスト教学校での英語の位置づけに反映されていた。

1. 問題の所在と研究目的

1840年以降に、アヘン戦争などの結果、中国は外国といくつかの条約を結び、欧米のプロテスタント宣教師が中国本土に進出しはじめた。中国へのキリスト教布教は言語に関する問題と密接に関わっていた。すなわち、宣教師にとっての現地語の学習¹⁾ (Goodrich 1893、Parker 1898、Wisner 1893など)、聖書やキリスト教文献の中国語(中国語口語や文語)訳に関する検討(Helm 1877、Mateer 1886など)、中国語の音声や語彙、

文法に関する言語学的考察 (Edkins 1872、1889、Silsby 1893 など) が課題となったのである。キリスト教学校が中国で設立された後、それらの学校での教育活動を中国語で行うか、あるいは英語で行うのかは重要な焦点となり、その上で「英語を教えるか否か」といった英語教育をめぐる議論が繰り広げられた。顧 (2002) によると、英語教育をめぐる宣教師たちによる論争は、1) 長期間にわたり行われたこと、2) インパクトが大きいこと、3) 多くの宣教師団体が関与したこと、4) 英語教育をめぐる意見の対立が激しいこと、5) 教派よりも宣教師の派遣地によって意見の一致が見られるといった特徴がある。また張、蔡 (2020) は、英語論争において宣教師の言語観が、当初の中国語教育や中国語を教育言語とする教育への支持から、キリスト教学校には英語が最適であるという見解へと変化し、中国人にキリスト教文明を受け入れさせ、英語を学ばせるといった言語同化主義が反映された (張、蔡 2020 : 58) と主張している。

なかでも長老派宣教師マティーア (C. W. Mateer、狄考文²⁾) は、中国最初のキリスト教高等教育機関を設立し、英語を取り入れない方針を貫いた。張 (2022) によれば、マティーアが英語教育を勧めないのは、以下の理由による。英語および英語がもたらす金銭的な報酬は生徒の道徳に悪影響を及ぼし、中国でのキリスト教の発展に不利になる。また英語の習得は中国語の知識の低下を招くことから、教育言語を中国語にすることにより、これを避けようとした。英語は大学院教育での科学の勉強のために使われるべきであると、マティーアは主張していた。

このようにひとりの宣教師の言語教育観に焦点を当て、英語教育の是非に関する結論に至るまで、英語はどのような言語か、中国で英語を教えることの意義はどこにあるかなど、張 (2022) はマティーアの言語教育観を解明した。そこで本稿では考察の範囲を拡大し、英語教育をめぐる議論の全体像を解明するために、複数の宣教師の言説を分析し、問題の所在を突き止める。すなわち、英語教育に対する賛否のみならず、その根底にある宣教師の英語観の解明を目指す。

先行研究によれば、マティーアが 1877 年に中国プロテスタント宣教師大会で行った講演「プロテスタント宣教と教育との関係 (The Relation of Protestant Mission to Education)」は、キリスト教学校が伝道組織でなく、次第に教育機関としての役割を果たすようになることを意味する (胡 2000 : 83)。しかしこれ以前の 1869 年に、広東で活動する長老派宣教師ノイエス (H. V. Noyes、那夏礼) は『教務雑誌 (The Chinese Recorder) ³⁾』に寄せた「中国人アシスタントに対する英語教育について (On Teaching English to Chinese Assistants)」において、すでに宣教師による教育・言語教育問題について論じていた。またその他にも、1877 年、1890 年に開催された中国プロテスタント宣教師大会 (General

Conference of the Protestant Missionaries of China、以降は「宣教師大会」と略す)と1893年、1896年に開催された第1回、第2回中華教育協会会議(Triennial Meeting of the Education Association of China、以降は「教育協会会議」と略す)に、中国各地より、さまざまな教派のプロテスタント宣教師が集まり、英語教育の是非について意見交換をしていた。これらの言説と宣教師集会は、19世紀後半が、言語観をめぐる議論が盛んに行われた時期であったことを示している。本稿は分析対象を『教務雑誌 The Chinese Recorder(1868-1900)』、宣教師大会と教育協会会議の議事録といった文献資料に求める。これらの中から、英語教育に関する言説を抽出し、分析と検討を行う。なお引用文の日本語訳は、特に明示しないかぎり拙訳である。

本稿は英語教育論争の背後にある宣教師の言語イデオロギーの解明をめざす。第2章では、まず宣教師の言説に現れた英語の位置づけや特徴、役割を分析し、彼らの英語観を明らかにする。第3章ではさらにキリスト教における英語教育をめぐる諸問題に関する宣教師たちの見解を検討する。具体的には、キリスト教宣教と英語の関係や、各種の学校における英語の取り扱い、中国語と英語との関係といった課題がある。これらの問題はいずれも宣教の実務にかかわっており、教育現場での行動に関する宣教師の見解とともに考察することにより、宣教師の言語観をより鮮明に分析することができる。最後に結論と今後の課題についてまとめる。

2. 19世紀中国社会における英語に対する宣教師の認識

2.1. 経済的な利益に直接につながる英語

1840年代以降、中国は諸外国と条約を結び、鎖国状態を終えた中国の沿岸部では開港場で外国人との貿易に必要な英語の需要が発生した。通訳や仲買いの仕事に従事し、金銭的報酬のために英語教育を求めた生徒が存在したことは、一部の宣教師にとって英語教育に反対する根拠となっており、そのなかでマティーアの言説は代表的である。マティーアによると、「英語を学ぶほぼすべての人は良い生活や服、他の贅沢品などを欲するようになる。彼らの生活習慣と人生に対する考えは、中国人と異なるようになり、現地の人々が持つ質素で儉約な生活習慣に同情できなくなる。彼らは直接的、または間接的に外国人と関わりを持つようになり、また英語ができ、お金を稼ぐことができるようになると、(中略)経験からいうと、彼らの道徳は破壊されることがつねに見られる(Mateer 1890: 462)」。マティーアによれば、英語学習は結果的に生徒の生活習慣に変化をもたらし、道徳の低下を招く。

それに対して、1890年に行われた第2回宣教師大会で、レイシイ (W. H. Lacy、力為廉) は派遣地 (福州) のキリスト教教育の実施状況に基づき、マティーアの観点に反論を唱えていた。レイシイによると、福州の宣教状況から考えると、英語は学生を学校にとどめるための最良の方法である。「英語の有用な知識を身につけるのに十分な期間 (学校に) 残った者は皆、今では立派な職に就き、キリスト教的人格を保持している。(中略) 福州宣教師連合 (Foochow Missionary Union) は最近の会合では、福州での福音伝道の一つの要素として、英語教育の価値について検討した (Lacy 1890: 497-499、カッコ内は筆者による補足)」。同じく民衆が英語を求めていることから、生徒は英語をできるようになるにつれて、学校から去るか、長く学校にとどまるのか、宣教師たちは異なる結論に至っている。この実用的な理由からの英語教育に対して、ピルチャー (L. W. Pilcher、李安德) は容閔 (Yung Wing) の例を挙げている。容閔は中国初の留学生としてイエール大学に留学したが、留学時代から中国の若者にアメリカの大学に留学させる事業を計画し、これはのちに清政府の官費留学事業「留美幼童」(1872-1881年実施)へと結びついた。容閔は1855年の卒業後に帰国し、しばらくのあいだ通訳や茶・生糸の仲買いに従事した。容閔の教育に費やした時間と資金は無駄でなく、「失敗したと思われたこの年月の間に、容閔は壮大なアイデアを抱き、その結果は一時的に見えなくなったが、未来は約束されていた。容閔が中心となって推進したアメリカへの教育使節団に関係した若者たちは、今日、急速に影響のある地位に登っている (Pilcher 1889: 404)」とされる。このようにピルチャーは、長期的な視点から英語の実用性を評価するよう提案をしている。すなわち、英語教育に対して、当分のあいだ実益をもたらしたにせよ、その価値を否定することなく、生徒に潜在的に有利な影響を与える可能性を見据えるべきであると考えた。

2.2. 高級文化や、国と民族の進歩を反映する英語

英語教育に賛同する意見のなかには、英語で記されている近代科学に関する知識への言及も少なくない。例えばプラム (N. J. Plumb、李承恩) は、英語と中国語による教育を推奨し、英語教育のメリットとして、以下の2点を挙げている。1) 中国語では科学的思考を表現する用語が少なく、統一性に欠けていることから、英語の教科書を参考に勉強することが有益である、2) 英語で書かれている広範囲の知識を活用し、生徒自身の要望にしたがって学びを深めることができる (Plumb 1890a: 455)。ここでは、中国語は学術用語や文献の蓄積に欠けているが、英語を通じて西洋の近代的な知識にアクセスすることができるため、英語を使うことによりその機能を補うことができると提言し

ている。またヘンリー (B. C. Henry、香便文) も、英語は中国人にとって理論的で実践的な西洋科学の知識を紹介するための道具 (vehicle) として使われべきであると主張した (Henry 1881: 227、土肥 2007 の訳を参照)。ポット (F. L. Hawks Pott、卜舫濟) はさらに日本の例⁴⁾ を採りあげ、「明治維新 (the regeneration of Japan) は、日本の改革者たちが英語を知り、それを媒介として西洋思想を導入したことに負うところが大きい (Pott 1896: 62)」とし、中国が新思想を取り入れるために英語は最良の方法の一つであることを例証した。

以上の観点には、生徒の学習や中国社会の進歩を図るには、英語を経由しなければならないとの発想が共通している。中国語への翻訳を待つことなく、教育活動の実践にあたり英語で書かれた既存の教科書を使うことには大きな利便性があるほか、高級文化を構成する思想や科学の伝達には英語が優れている。それに対して中国語への翻訳に成功しなかったとすれば、「思想になかったものが言語にあるはずがない」からであり、西洋の思想や科学が中国語に翻訳できるまでは、英語を科学知識の教授に使い、中国語の発展を待たなければならない (Faber 1893: 17)。このような言説は、言語そのものの優劣でなく、中国語がまだ発展の途中にあることを指摘し、英語による思想や知識の導入を通じた進歩に焦点を当てるものである。

また、英語はアングロ・サクソン民族や英語圏の国々の文明や進歩に関連づけて考えられている。「アングロ・サクソン民族の進歩や英語の普及は、英語が最も便利な言語であることを紛れもなく示している (Tenney 1889: 370)」と考えられ、中国は、「この言語 (英語) を採用することにより、この国の文化の進歩を英語圏の民族の進歩と結びつけることができる。文学や科学、芸術などの近代文明において、英語圏の民族が優れていることは誰も疑わない (McCoy 1883: 250、カッコ内は筆者による補足)」。すなわち、ここで高級文化によって示されている民族の優越性は、言語を通じて他の国に移行するとみなされている。ピルチャーもアメリカン・ボードの秘書クラーク (Clark) の発言を引用しながら 1888 年のインドにおける英語の使用状況について紹介している。インドでは 300 万人が英語を読み、話しており、このようにしてアングロ・サクソンの知的・道徳的な生活に触れている (Pilcher 1889: 404)。書籍を通じて西洋の知識を摂取するだけでなく、アングロ・サクソンより道徳的な影響も受けるとの観点は、英語が生徒の道徳を墮落させるとのマティーアの立場に対立している。

さらに、中国が強国になったときに、中国の若者は英語やその他の外国語を急いで学ぶ必要はなくなるとの主張もみられる。ただし、それ以前に、英語などの外国語の学習を放棄してしまうことは中国全体の国益を損なうことになる⁵⁾。この言説には、国力の

強い国の言語を学ぶことが、一時的な需要に従うとはいえ、当時の中国にとって必要不可欠であることを伝えている。

2.3. 英語が持つ思惟性

ここでの「英語の思惟性」は、主に以下のような見解に認めることができる。一つは、英語を学び、使うことにより、学生の思考力が伸びるとの言説で、「中国人の記憶力は本能的なもので、翻訳された西洋の教科書を手にしただけでも、それを記憶するようになっている反面、英語で書かれた本は、学習者に言葉や用語の意味、定義を知るために考えさせるものでもある⁶⁾」と語られている。これは中国人宣教師顔永京 (Y. K. Yen) の発言であり、中国の教育が丸暗記を重視することは欧米宣教師の言説にも頻繁に登場している (例えば McCoy 1883: 255、Mateer 1877: 428)。テニー (C. D. Tenney、丁家立) (1889) は英語が「正確さと明瞭さにおいて、中国語よりも計り知れないほど優れた思考の媒体 (medium of thought)」であると主張し、さらに、西洋の国々において知識人を称する人々の必須条件とは、一つ以上の言語を身につけることであり、このようにして英語学習に反対する意見に反駁する。中国語以外の言語の能力は高度な思考力や知識人の資質につながるもので、生徒の精神性 (spirituality) (Plumb 1890b: 508) にとって有益であると宣教師は強調している。

もう一つは、英語と思考様式との関わりである。例えばノイエスは言語の法則と思考の法則を同義に扱い、「中国人学生の心に宗教的思考を植え付けるには、プロテスタントの掲げるキリスト教世界の大部分がその思想を表現する言語を学生に与えることにもまして確実な方法はない (Noyes 1869: 253)」と論じ、英語学習が精神的な手段として使われる必要性を力説している。

2.4. 文明語と宗教言語

英語教育を論じるにあたり、ギリシャ語やラテン語の例をあげながら英語を近代中国のなかに位置づけようとする宣教師がいたものの、その喩えの手法⁷⁾とそこから帰結する論理には大きな差異が見られる。

例えば、中国における英語は、「かつてイギリスでギリシャ語やラテン語が占めていたような位置を占めるようになる。西洋の宝物への扉を開くための鍵となるべきものである (Pott 1896: 63)」、英語は「オリент世界の言語になる。現在の英語は、かつてのギリシャ語とラテン語である (Faber 1893: 55⁸⁾)」といった言説がある。15世紀の終わりにいたるまで、ラテン語は西欧の知と信仰の言語であり、公的な言語使用において

支配的（バッジオーニ 2006: 84）であり、イギリスの教育システムではギリシャ・ラテン語モデルが17世紀まで根強く続いた（同上: 184）。ルネッサンスの興隆にあたり、ギリシャ文学がヨーロッパに伝わったことが大きな要因となっている。これらのことを考慮に入れると、おそらくポットとファーバーは、英語が古代の文明語や宗教言語のように、中国で独占的な地位を持つようになることを確信したと考えられる。

一方、「ギリシャ語やラテン語がヨーロッパやアメリカの学校で高い地位を得ているのは、中国との関係ではない（Noyes 1876: 254）」という分析もみられる。というのも、例えばロマンス諸語（フランス語、イタリア語、スペイン語など）はラテン語に近いことから、「これらの言語を学ぶことは、自分の言語を徹底的に知るための最も確実な方法である。これは、もちろん中国人との関係では何の効力もない。（中略）中国人にとって英語は死んだ過去よりも生きている現在にはるかに関連している（同上: 254）」からである。すなわち、近代の欧米の言語は語源からみると、ギリシャ語やラテン語と関わりを持つものの、中国語は英語とまったく異なり、両者のあいだに歴史的なつながりはない。それに基づきノイエスは、欧米の学校が生徒にギリシャ語やラテン語の教育を行うように、中国の一般の学校では英語教育を実施すべきではないと結論づけている。

英語が19世紀の中国に与える影響について、入華宣教師たちの言説は以下のようにまとめられる。宣教師の視点からみると、英語は西洋文明の象徴であり、中国語とは歴史や語源のうえからつながりががないものの、英語には現実的な利益が期待されていたことから、当時の中国や民衆にとって望ましいと同時に、中国人生徒の学習や国全体の近代化にとって有益であると語られていた。次の章では、ここまで分析した英語の位置づけが、宣教活動とキリスト教学校の運営のなかでどのように反映されているかについて、宣教師たちの言説から考察したい。

3. 宣教活動とキリスト教教育における英語の取り扱い

3.1. 宣教活動との関係：特定の社会階層と結びつく

19世紀の中国において英語は商業的な用途と同時に、政治や外交の道具としても登場した。そのために1862年に設立された同文館をはじめとする官立洋務学堂によって人材が育成され、「八旗」、すなわち支配階層である満洲人が所属した社会・軍事組織に属する若者の入学が許可され、キリスト教学校は外交人材の育成に参与しなかった。しかしながら、これを契機として、宣教師は英語を社会の「上層部」に接近する手段とみなすようになった。ピルチャーによると「李鴻章総督の子供たちは家庭教師に英語を教えて

もらっているし、曾総督⁹⁾の息子たちもそうだ。他にも、あまり知られていないが、教育を受けた有力者たちの間で、西洋の言語を使って西洋の思想を知りたいという感情が高まっている (Pilcher 1889: 405)」。ここで有力者たちが英語を家庭教育に取り入れたのは、英語圏の高級文化の摂取や外国との交際を目的としたためであろう。キリスト教を中国で広げるにあたり、影響力を持つ官吏や有力な知識人と親交を結ぶのは一つの「近道」(胡 2006: 32) であると考えられ、英語はその目標を満たすための手段として位置付けられた。ボーンネル (W. B. Bonnell、馮昌黎) (1893) も、英語とキリスト教そのものを切り離す一方で、英語の有用性に着目する。「現在、英語を必要とするのは、ビジネスの準備のためだけである。しかし、宣教師たちはこの仕事をあきらめて、(その役割を) 異教徒に引き渡すべきか。これは、特定の階層に接近するための唯一の機会である (Bonnell 1893: 55、カッコ内は筆者による補足)」。ボーンネルは、日常の宣教活動のなかでは英語の有用性を否定しているものの、宣教の効果を上げるための英語の価値を大いに認めている。このように、英語とともに、「科学や数学を教えることで、他の方法では接近できなかった多くの人々を私たち (宣教師) の影響下に置くことができる (Plumb 1890a: 452、カッコ内は筆者による補足)」。宣教師が中国に進出した時期に設立されたキリスト教学校では、外国人への嫌悪感のゆえ現地での生徒募集が困難であった。この問題を解決するために、宣教師たちは入学する生徒に衣食を供給し、学費を無料にするほか、宿泊費や旅費まですべて学校によって負担させるようになった (顧 1991: 226)。そのため入学したのはほぼ貧困層の子どもであった。しかし、英語と近代科学の需要が出現するにつれて、キリスト教学校の入学希望者は富裕層の若者にも拡大され、学校も授業料を徴収するようになった。

英語はより広範囲の民衆に接近する以外にも、キリスト教に有利になる人材の選別にも役立った。ヘッドランド (I. T. Headland、何徳蘭) (1896) によると、英語ができない中国人にとって、外国の教育は教会で働くための準備以外には、ほとんど何の役にも立たない。そのため、英語は宣教を志す若者の選別に使われる。というのも外国の教育であれ英語の教育であれ、それらは肉体労働 (Headland 1896: 60) の役に立たないため、キリスト教を志願しない人はこのような教育を受けないからである。このような見解の根底には、先に論及した英語の用途や特徴を否定する立場があり、英語がもっぱら宣教に適しているとの固定観念を表している。そして、そこからヘッドランドは英語が肉体労働者、すなわち当時の中国の一般大衆とは切り離された存在であると考えていることが読み取れる。

ノイエス (1869) とヘンリー (1881) は宣教活動との関わりについて、対照的な議論

を繰り広げている。ノイエス(1869)は英語教育を論ずるにあたり、「中国人アシスタントにどの程度の教育を与えることを目標とすべきか」という問題を考察している。宣教のために英語教育を実施すべき対象とは、これから司牧に関わる聖職者やキリスト教書を執筆する者であると考えられる一方で、キリスト教書籍を配布する人々に向けた英語教育は必須でないとも主張する。しかしながら、1881年になるとヘンリーは、宣教のための英語教育の必要性はすでになくなったと明言する。「人々の好意を確保したり、仕事の機会を増やしたりするための餌として、英語教育を持ち出す必要性は全くない。もし、『宣教師として適切な仕事をするための助けとして、英語を教える必要があるか』という質問があったとしたら、いささかのためらいもなく、はっきりと否定的な答えが返ってくるだろう(Henry 1881: 225)」と、*Chinese Recorder*に発表した論考で述べている。ヘンリーは同じくアメリカ長老派教会に所属し、広東で宣教・教育活動を行っていたものの¹⁰⁾、12年のあいだにこのように意見の差異が生じた。しかし、それは宣教師個人による意見の違いなのか、それとも当時の宣教やキリスト教学校の運営状況の変化によるかは不明である。ただし、ファーバーは1893年に行った講演においても、英語の教授は、宣教活動に直接に役立つものではないと主張した(Faber 1893: 15)ことから、宣教の進展にしたがい、英語の直接的な役割は後退していったかもしれない。その後、商業活動や西洋の思想、近代科学を獲得するため中国社会に現れてきた英語に対する需要は、キリスト教宣教活動が直接にもたらしたものでなかった。にもかかわらず、キリスト教学校が英語を取り入れ、その需要を満たすとの宣教師たちの意見には、英語で生徒にキリスト教の教義と接触させる機会をつくり、外国人やキリスト教に対する好意的な態度を育てるとの意図が含まれている。

3.2. キリスト教教育との関係：教育段階と学校の種類による差異

キリスト教宣教団体が中国本土に進出した当初に設立した学校には初等学校が多く、1880年代になると高等教育機関(大学)が次々と設立されるようになった。これらの学校での英語教育については、教育段階や学校の種類によって異なる措置をとるべきだという意見も現れている。例えばテニーは、「どの国でも、大衆的な、あるいは一般の学校教育(popular or common school education)と高等教育(higher education)と呼ばれる2種類の教育が目指されている。中国の新しい教育でも、同じように区別されるだろう。西洋では、普通学校のコースからラテン語やギリシャ語、ドイツ語やフランス語を省くことが賢明だと思われるかもしれないが、大学の教育課程からそれらすべての言語を除外すべきだと真剣に主張する人はいないだろう(Tenney 1889: 496)」と論じ、高等教育

段階に外国語を取り入れる方針はどの国にも共通すると主張している。ここでの一般教育 (common school) は、初等教育段階の学校、すなわち小学校を指している (McCoy 1883: 249)。この発言には、英語教育の必要性を論じるにあたり、英米の学校が定める外国語教育の実践に従おうとする意図が現れている。そしてファーバーは、初等教育や高等教育、科学教育を区分し、学生に英語を早く習得させるように、高等教育の早い時期から英語を加えることを推奨し、科学教育もすべて英語で行うべき (Fryer & Ferguson 1896: 247¹¹⁾) だと主張している。

教育段階に応じて、異なる英語教育の方針を採用する考え方と同様に、ノイエス (1867) はキリスト教国の教育を一般教育 (common education)、リベラル教育 (liberal education) と専門教育 (professional education) (神学校、医学や法律の学校) の3種類に分類し、リベラル教育とそれに基づく専門教育では、言語教育が行われていたと伝えている。それに対してキリスト教国における一般教育では自国語を教育言語にしている。なぜなら一般教育は、子供たちの心に神の真理の種を植えることを主な目的としているためであり、外国語を教えることは賢明なことでもなく、また望ましくない (Noyes 1869: 251)。さらにヘッドランド (1896) はキリスト教学校をリベラル教育と位置づけ、キリスト教を支配的な原則としない学校では英語を第一に定め、英語が進展するところには必ずキリスト教が展開すると確信している。キリスト教学校が神学校であるか、リベラル教育にあたるかに関する、二人の宣教師の見解は分かれているものの、英語教育の是非をめぐる考え方は変わらない。一方、どの言語でも、優れた学者はみな若い頃から外国語学習を始めたとの理由から、一般教育段階から外国語を教える (McCoy 1883: 250) という早期英語教育も提案された。

宣教師たちは中国のキリスト教教育の言語問題を考察するあたり、欧米諸国の教育システムを参照のうえで以上の言説を展開している。そこには当時の中国における教育の現状や、キリスト教教育と中国の当時の教育システムとの関係の配置に関する議論は見当たらない。このことから、キリスト教宣教師は、現行の教育制度を撤廃し、それをキリスト教教育に置き換えよう (Kupfer 1886: 419) と企てていたと推測できよう。McCoy (1883) も中国の教育制度の欠点を指摘し、西欧のキリスト教国からもたらされた、より優れたシステムによって中国の教育を代替しなければならないと主張しながらも、中国の科挙制度が学習を促したおかげで、新しい教育システムを取り入れやすくなったとも考えている (McCoy 1883: 253)。

1880年代に入ると、入華宣教師のあいだに教育事業への関心が高まった。Kranz (1895) によると、1860年代から1870年代にかけて、*The Chinese Recorder* に掲載されたキリス

ト教教育に関する論考は13本しかなかったのに対し、1880年から1894年までは71本の論考が発表された。教育に関する議論が増えたほか、宣教師たちは教派の違いを問わず、教育団体を結成しはじめた。1877年5月に上海で開催された宣教師大会では「学校教科書委員会 (The School and Textbook Series Committee)」の設立が決定されたが、これは近代中国における教科書を編纂・出版する専門機関の誕生を意味する。また1890年の第2回宣教師大会では、「学校教科書委員会」が「中華教育協会 (The Educational Association of China)」に改組され、これは、のちに「中国キリスト教教育協会 (The Chinese Christian Educational Association)」に改組された。このような名称を見ると、キリスト教宣教師団体は「キリスト教教育」というカテゴリーを設けることなく、中国の教育の主導者としてみずからを位置づけていることが読み取れる。

また宣教師の英語認識に関連して、フライアー (J. Fryer, 傅蘭雅) は、中国人のための英語学校では通訳やその他の実用的な仕事が第一に求められるべきであるとし、学術研究を行う資質があることを証明した学生にのみ、英語で教科教育を行うべきだと発言している。ここで英語を教科として教えることと、教育言語として学術知識を教えることとの区別は顕在化されるようになった。

3.3. 現地語（中国語官話、方言）教育との関係：二言語併用のもとの優先順位

英語教育の是非について、宣教師たちが公開の場で議論を続けていたなかであって、数多くの宣教師は、当時の中国語がまだ西洋科学の教授に適していない (Tenney 1889: 369, Pott 1896: 63, Fryer & Ferguson 1896: 247) との観点から、英語教育を推奨している。そこからキリスト教学校における中国語と英語との関係が課題となる。McCoy (1883) は英語を導入する目的は、中国語を排除したり、代替することではなく、中国語を豊かにするためであると説いた。中国語で教育活動を進めてきたマティーアも、できるなら中国語と英語をともに教育内容に取り入れることが望ましいと判断しているにもかかわらず、学生の就学年限には限りがあるため、中国語で教育を行うと妥協を示している (Mateer 1890: 462)。またアレン (Y. J. Allen, 林樂知) は、英語と中国文学をともに徹底的に習得させることが、キリスト教学校のカリキュラムで重要視されるべきだと強調している (Fryer & Ferguson 1896: 244)。以上の発言を通じて、英語か中国語かのいずれかの言語のみを教える二者選択の代わりに、キリスト教学校で二言語を取り入れることは宣教師にとって理想的であることが判明する。というのも、英語だけを取り入れると、生徒にとっての中国語の知識は非常に不十分で粗雑なため、国家の改善に貢献することにならない。また当時の中国語はまだ外国の科学を教えるのに適した媒体ではないため、

中国語だけを用いて科学を教えるのは難しい（同上：246-247）ためである。そのほか、1893年に行われた第1回教育協会会議で、ファーバーは「中国におけるキリスト教教育の問題点（Problems of Christian Education in China）」を発表し、中国語と英語との関係について以下のように述べている。中国政府によって設立された学校では、英語が中国語研究の付属として教えられていたが、キリスト教学校の場合、「外国人の管理のもとで英語がある程度完璧に教えられている場合、中国語の勉強はそれに従属し、それに適したものにするべきである（Faber 1893: 15）」と主張し、英語を優先的に教え、中国語を二次的に扱う方針を宣言している。一方、「英語の教育を受け、中央政府で高い名誉を得ようとする野心的な中国の若者は、健全な中国語の教育を基礎とすべきである¹²⁾」のように、中国語を英語教育の前提とする論考も展開された。このような言説を見るかぎり、キリスト教学校における両言語の併用は全体的な傾向として指摘されるにもかかわらず、キリスト教学校の運営状況や宣教師の理念によって、その二言語の優先順位にはばらつきがあることがわかる。

ファーバーはさらに「英語化」された中国語を作り、学校でそれを使うことを提案している。「英語化」された中国語とは、ローマ字化された中国語のことである。ローマ字化・アルファベット化された中国語は「外国の専門用語や固有名詞の使用を非常に容易にし、（中略）中国の現代教育の言語となる（同上：14-15）」とされている。それに対して、ファーバーの論文が発表された後に行われた議論では、フライアーはローマ字の口語（ここで英語を指す）が決して流行することはないと主張し、キリスト教学校で英語でなく官話（口語中国語）を教えるほうが望ましい（同上：17）と提言している。文字表記に基づき中国における中国語と英語の使用状況を予測する宣教師は、それまでみられなかった。

教育言語の採用にあたり、言語学的特徴から考察する Gustavus (1877) は、中国語に英語のような屈折変化がなく、他言語からの借用もなかったことから、中国語を大きく改善することはできないと考え、国の進歩に対応し発展することがなく、いつしか中国人が自分の言語を捨ててしまうと推察している。その結果、中国やその民族の進歩の一部として、新しく優れた言語、つまりすべての階級に教育を可能にする言語が必要になるとの見解を伝えている（Gustavus 1877: 473）。ここで提示する「新しく優れた言語」は、英語を指すと考えられる。

4.1. 結論と考察

本稿では、19世紀後半からの中国のキリスト教学校における英語、及び英語教育をめ

ぐる議論を考察し、その議論の根底にある宣教師たちの言語観を解明するため、19世紀入華宣教師の言説を分析してきた。宣教師たちが公的な場で発表した講演や論説を分析したところ、彼らはその地域における英語の社会的需要や用途、および中国語との比較といった点から、英語には以下の特徴があると評していることが判明した。1) 実用的であり実益に直接つながる言語、2) 近代の西洋知識と思想を中国にもたらす媒介、3) 「欧米のラテン語・ギリシャ語」のような文明語、宗教語、4) 思考様式と思考能力に密接に関連し、強い思惟性をもつ言語である。

1840年のアヘン戦争とその後締結された条約により中国は鎖国状態から半植民地・半封建社会に変わっていた。それをきっかけに中国に進出した宣教師たちは、インドと日本の例を挙げ、英語には中国さらにはアジアの「文明化」を推進する役割があると構想した点で、ここには言語帝国主義との親和性が認められるものの、宣教師たちによって行われる教育活動には「植民地教育」の特徴（フィリップソン2000:97）に一致しないところもある。例えば、キリスト教学校における現地語（中国語）と英語の二言語併用や、中国の国力が強くなるまでの一時的な英語学習の方針などは「植民地教育」との差異を示している。宣教師は英語に対する言語的優越性ととともに、中国語の価値も認めるという言語イデオロギーを持っていたのかもしれない。

英語を媒体とすることにより、西洋の知識や思想に好意的な中国社会の上層部に接近することができるという点で、英語は宣教の補助装置となる。ただし、日常の宣教活動を行う際の英語の有用性についての宣教師たちの見解は時代によって異なる。

Chinese Recorder に載せた英語と英語教育に関わる論説を年代別にまとめたところ、言語そのものの優劣を比較（Gustavus 1877: 472）し、アングロ・サクソンの文明とのつながりを強調する（McCoy 1883: 250、Pilcher 1889: 404）言説は、1890年代以前に集中している。1890年代に入ると、英語がどのように科学知識の教授やキリスト教の影響に関わるのかといった議論に移行し、英語はむしろ教育問題として扱われる傾向にある。このような傾向が生じた一つの理由には、1886年「海外伝道学生奉仕団」（Student Volunteer Movement for Foreign Mission）運動を中心に、欧米の教団より宣教師のみならず、専任の欧米人教師も中国に派遣され、そのため教育の専門性が強くなってきたことを忘れてはならない（胡2000:93）。

キリスト教学校で英語を教えることに関して、宣教師は教育段階（初等教育か高等教育か）と学校の種類（大衆に向けた学校か専門学校か）に応じて、英語教育の是非を決めていた。またキリスト教学校で中国語と英語を同時に使うことに対して、ある程度の合意を得ていたものの、どの言語を優先するかについて意見は分かれていた。さらに、

宣教師たちは中国における教育の現状を考慮することなく、宣教団体の力によって中国の教育を再建するとの願望を抱いており、これが本稿で分析した宣教師たちの言説の前提であろうと考えられる。

4.2. 今後の課題

本稿で分析した言説は、公的な場で発表された宣教師の発言や論説であるため、現実の宣教状況とどのように関連性を持つのかについては今後の課題となる。また、宣教師たちの議論は、英語教育の賛否を論じることにとどまるもので、英語教育の利点や社会的背景を詳しく分析したにもかかわらず、具体的な英語の教授法や教科書などについての議論は見当たらない。中国各地の宣教状況、キリスト教学校の設立や運営状況に合わせて、入華宣教師が行った言説と活動の相関性をさらに考察する必要がある。そして中国政府側と欧米の宣教団体が策定した政策文書を参照のうえ、19世紀から20世紀の中国キリスト教学校における英語教育の全体像を解明する必要がある。

注

- 1) そのほか1875年7月の *The Chinese Recorder and Missionary Journal* には、1875年1月5日に大阪と神戸の宣教会議で発表された無署名の記事「日本語の習得について (Acquisition of the Japanese Language)」が掲載されている。
- 2) カッコ内に宣教師の本名と中国語名前を表記する。
- 3) 中国内外のキリスト教関係者向けに刊行された超教派の月刊宣教雑誌。1867年創刊。創刊時の刊名は *The Chinese Recorder and Missionary Journal* であった。中国語の刊名『教務雑誌』からわかるように、キリスト教教育に関する論述が掲載されている。
- 4) ピルチャーも、日本とインドの例を採り上げ、英語教育の必要性を説いた。中国で急速に発展し始めている「新しい教育」を進める上で、英語は大きな位置を占めなければならないし、日本とインドの現状からみると、そうなるであろうとピルチャー (1889) は主張している。
- 5) 1897年6月の *The Chinese Recorder and Missionary Journal* に寄せた無署名の記事“English Study” (pp. 288-289) を参照。
- 6) *Records of the Second Triennial Meeting of the Education Association of China* (1896年) p. 85 を参照。
- 7) 英語でなく、中国の古典を欧米におけるギリシャ語、ラテン語とともに議論する宣教師もいた。それについて別稿で検討する。

- 8) 1893年の第2回教育協会会議でボーンネルが行った講演をめぐるディスカッションにおける、ファーバーの発言であった。*Records of the Triennial Meeting of the Education Association of China* (1893年) p. 55 を参照。
- 9) ここでの「曾総督」は、曾国藩 (1811-1872) のことを指すと考えられる。
- 10) ノイエスは格致書院の校長(「監督」と呼ばれる)(1896-1899年)であり、ヘンリーは嶺南書院の創設者の一人であり、1893-1895年に校長を務めた。
- 11) これは、5人の宣教師に次の問題に対して答えを求めた記事である「現在の中国の教育では、数学、科学、漢文、英語、歴史、哲学など、どのような学問が最も重視されるべきでしょうか」。答えを提供したのは、マティーア、ヘッドランド、アレン、ファーバーとシルズビー (J. A. Silsby、薛思培) であった。
- 12) 前掲5) p. 289 を参照。

表 本稿で引用した宣教師の教派と派遣地

宣教師	派遣地	教派
アレン (Y. J. Allen、林樂知)	上海	American Southern Methodist Episcopal Mission (監理会)
ガスターヴァス (Gustavus)	不明	不明
クップファー (C. F. Kupfer、庫思非)	九江	American Methodist Episcopal Mission (N) (美以美会)
テニー (C. D. Tenney、丁家立)	天津	American Board of Commissioners for Foreign Missions (公理会)
ノイエス (H. V. Noyes、那夏礼)	広東	American Presbyterian Mission (N) (長老会)
マティーア (C. W. Mateer、狄考文)	登州	American Presbyterian Mission (N) (長老会)
ピルチャー (L. W. Pilcher、李安德)	北京	American Methodist Episcopal Mission (N) (美以美会)
ファーバー (E. Faber、花之安)	上海	General Evangelical Protestant Mission (同善会)
プラム (N. J. Plumb、李承恩)	福州	American Methodist Episcopal Mission (聖公会)
ヘッドランド (I. T. Headland、何徳蘭)	北京	American Methodist Episcopal Mission (N) (美以美会)
ヘンリー (B. C. Henry、香便文)	広東	American Presbyterian Mission (N) (長老会)
ボーンネル (W. B. Bonnell、馮昌黎)	上海	American Southern Methodist Episcopal Mission (監理会)
ポット (F. L. Hawks Pott、卜舫濟)	上海	American Protestant Episcopal Mission (聖公会)
マッコイ (D. C. McCoy)	北京	不明
レイシイ (W. H. Lacy、力為廉)	福州	American Methodist Episcopal Mission (N) (美以美会)
顔永京 (Y. K. Yan)	上海	American Protestant Episcopal Mission (聖公会)

(五十音順。教派名の中国語訳は、山本 2006 を参考して作成)

文献

- Bonnell, W. B. (1893). The Teaching of English in Mission Schools. *Records of the Triennial Meeting of the Education Association of China*, 55.
- Edkins, J. (1872). Connection of Chinese and Hebrew. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 215-217, 279-280.
- Edkins, J. (1889). Relation of Chinese to Western Languages. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 268-273.
- Faber, E. (1893). Problems of Christian Education in China. *Records of the Triennial Meeting of the Education Association of China*, 12-17.
- Fryer, J. & Ferguson, J. C. (1896) Educational Department. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 242-248.
- Goodrich, C. (1893). How to learn the Chinese language: Not by reading by talking. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 1-6.
- Gustavus (1877). The Future Language of China. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 462-476.
- Headland, I. T. (1896). With Our Present Experience Does it Pay to Use Mission Funds for Teaching the "English Language". *Records of the Second Triennial Meeting of the Educational Association of China held at Shanghai, May 6-9, 1896*, 56-62.
- Helm, B. (1877). The Mandarin Dialect for Christian Literature. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 164-166.
- Henry, B. C. (1881). Shall We Assist the Chinese in Acquiring a Knowledge of the English Language?. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 225-236.
- Kranz, P. (1895). List of Educational Articles from the "Recorder" 1869-1894. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 228-233.
- Lacy, W. H. (1890). Discussion, *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China held at Shanghai, May 7-20, 1890*. Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 497-499.
- Mateer, C. W. (1877). School Books for China. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 427-432.
- Mateer, C. W. (1886). The Easy Wen li New Testament, *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 51-53.
- Mateer, C. W. (1890). How May Educational Work be Made Most to Advance the Cause of

- Christian in China, *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China held at Shanghai, May 7-20, 1890*. Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 456-467.
- McCoy, D. C. (1883). How Far Should the Curriculums of Western Methods of Education be Adopted in China?. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 249-260.
- Noyes, H. V. (1869). On Teaching English to Chinese Assistants. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 249-255.
- Parker, A. P. (1898). How to Study the Chinese Language so as to Get a Good Working Knowledge of it. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 1-14.
- Pilcher, L. W. (1889). The New Education in China: The Place of the English Language. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 403-410.
- Plumb, N. J. (1890a). History and Present Condition of Mission Schools and What Future Plans are Desirable, *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China held at Shanghai, May 7-20, 1890*. Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 447-456.
- Plumb, N. J. (1890b). Discussion, *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China held at Shanghai, May 7-20, 1890*. Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 507-508.
- Pott, F. L. H. (1896). The Teaching of English, *Records of the Second Triennial Meeting of the Educational Association of China held at Shanghai, May 6-9, 1896*, 62-64.
- Silsby, J. A. (1893). Phonetic Representation of Chinese Sounds. *Records of the Triennial Meeting of the Education Association of China*, 55-62.
- Tenney, C. D. (1889). The English Language in Chinese Educational Work. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 469-471.
- Winser, O. E. (1893). Some Thoughts on the Study of Chinese. *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, 203-211, 260-263.
- 顧長声 (1991) 『伝教士与近代中国 (増補本)』上海人民出版社
- 顧衛星 (2002) 「晚清伝教士關於教会学校英語教學的爭論」『解放軍外國語學院學報』25 (1), 18-22.
- 胡衛清 (2000) 『普遍主義的挑戰：近代中国基督教教育研究 (1877-1927)』上海人民出版社
- 胡凱基 (2006) 『狄考文在華活動研究』清华大学修士論文
- 史靜寰 (1991) 『狄考文和司徒雷登在華的教育活動』天津出版社
- 張潔、蔡永良 (2020) 「從入華伝教士的語言爭論看清末民初教会学校的語言政治」『語言

政策与规划研究』12, 50-63.

張尋 (2022) 「米国長老派教会宣教師 C. W. マティーンアの教育思想—19 世紀中国キリスト教学校の言語選択に関する課題—」『キリスト教教育論集』30 (印刷中) .

土肥歩 (2017) 『華南中国の近代とキリスト教』東京大学出版会

バッジオーニ, D. (2006) 今井勉訳『ヨーロッパの言語と国民』筑摩書房

フィリップソン, R. (2000) 臼井裕之訳「英語帝国主義の過去と現在」『言語帝国主義』(三浦信孝、糟谷啓介編) 藤原書店, 95-110.

山本澄子 (2006) 『中国キリスト教史研究 (増補改訂版)』山川出版社

English in Chinese Society and Christian Education in the late 19th Century: The Protestant Missionaries' Viewpoints on English behind the "English Debate"

ZHANG Xun

Keywords: Protestant Missionaries, English ideology, Modern China, Missionary Work and Language, The History of Language Education Policy

Abstract

This paper aims to clarify the English ideology of Western Protestant missionaries in nineteenth-century China. After the Opium War, missionaries entered China and began to set up Christian schools as part of their missionary activities. In the second half of the nineteenth century, missionaries in China engaged in an "English debate" over the introduction of English into these Christian schools, and behind this debate was the missionaries' view of English in China. This paper examines the details of this English ideology through the articles published in missionaries' journals and speeches at missionary conferences.

These comments made by the missionaries, who took advantage of the unequal treaty to enter China and to engage in educational activities in the semi-colonial China, suggest viewpoints of the language which, while showing the characteristics of linguistic imperialism, also highly recognizing the value of the local language (Chinese). These viewpoints of the English language were later reflected in how English was handled in Protestant missionary work and Christian schools in China.

(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)

張 尋